

続ボラッチョ・ボニートのメキシコ便り(No.39)

「一方の戸が閉まれば、他方が開く？」

・・・発車オーライ(2)・・・

近郊を含む都市圏の人口では、東京(東京圏)に次ぐ、世界第2位の規模であるメキシコシティ。その人間の移動を昼夜担っている交通機関のうち、代表的の一つが、市内に11路線を持つ地下鉄(メトロ)である。

現在でもさらに新線を建設中であり、私が住んでいるアパートのある街区でも、工事が行われており、発展しつつあるメキシコを象徴するかのごとく、周辺は交通渋滞と活気を呈している。



メトロは、路線自体は番号で分けられおり、その番号さえ間違えなければ、どこに行くのも3ペソ(約33円)であるので経済的といえるが、定期券等は無く、その都度乗車券を購入するか、チャージ可能のプリペイドカードで乗ることになる。

この地下鉄は、フランス製で車輪の外側はゴムタイヤで出来ており、この構造ゆえ、加速は高加速であつというまにスピードが出るし、ブレーキも効きやすく、握り棒につかまっていなくて、ふり跳ばされそうである。ゴムタイヤとはいえ車両の通過音は意外と高い音を発する。

それでは、昼間のメトロに乗車してみよう。駅構内や車内のアナウンスが無いので、どこを走っているのか、駅構内の薄暗い中、少ない駅名表示を懸命に追わなければならない。表示自体この駅名表示だけで、次が何処の駅かも示していないので、地理不案内の者が乗ると、掲示されている車内案内の表示と見比べながら、降りる駅を心配するのである。

どこかの国のように、うるさいくらいの、「箸の上げさげの仕方や手とり足とり指導」に類した車内放送もないので、車内は車両音だけと思いきや、そうでもない。おや！なにやら大きな音が聞こえてきました。

「MP3フォーマット(時にはノーマルフォーマット)だよ。ムード音楽からロックまでたくさんの曲が入っていて、10ペソ(約110円くらい)だよ、安いよ！」

車両内で海賊版音楽CDを売りつけている人である。背中に音響機器を背負って大音量でCDの音楽を流し、車両の騒音とその音響に負けないくらい大きな声を張り上げている。そのほかに、チューインガムやその他の駄菓子、ティッシュペーパー、ボールペン、電池、手回し発電装置など、商品を高くかざして、大声で叫びながら入れ替わり立ち代りでやってくる。

これらをまとめて日本の車内販売のように、ワゴンなどで売りにくるのではなく、個人が1商品のみを売りに来る。時には子連れの女性が物乞いに類したことを行うこともある。車両間は行き来できないようになっているし、駅間はそれほど長くないので、停車するとすぐ隣の車両へ走っていく。

僅かでも物を買う人、無視する人・・・人情と冷淡。ショバ代と称して、僅かな収入だろう彼らの上前をはねる悪い輩は、この国にはいるのだろうか、etc. 色々考えが頭に浮かび、メランコリックな気分におそわれる。まさにここにも、庶民のしたたかさと言うか、懸命さと言わざるを得ない社会の縮図がみられるのである。

次に、通勤時間帯に乗ってみよう。概してドアの開いている時間は短く、混雑していて乗り降りが完全に済んでいないのに、予告音なしに容赦なくドアを閉めてしまう。従ってこの乗り換えのときは、皆ずさまじい。

降りる客と乗る客のラ、グビーのスクラムに似た状態。まさに闘いである。本来の遣い方と意味合いは異なるが、次の諺が頭に浮かぶ。

「**Cuando una puerta se cierre, otra se abre**」(クアンド ウナ プエルタ セ シエレレエ オトラ セ アブレ と発音し、直訳は、一方のドアが閉まれば、他のドアが開くのだが、日本の諺では捨てる神あれば、拾う神もあるであろう)

一方のドアが閉まれば、他方のドアが開く？とんでもない。乗り降り以外は、人などがドアに挟まれたときしか開きません☺。

従って、このときの状況は拾う神も仏も存在せずで、法定老人年齢を超えた、よぼよぼ老人のボラッチョ・ボニート氏にとっては、見たことがないが(。^。)まさに地獄なのだ。

日本のようにホームに乗車の為の整列線が引いていないので、乗客はホーム横一杯に並んでおり、電車が止まると巨漢ぞろいの乗客が、我先に入りに突進するので、ボラッチョ・ボニート氏は、たとえ列の前に並んでいたとしても、スクラムの輪に入れずいつも弾き飛ばされてしまい、朝の通勤時間帯は最低でも5、6両はパスして、少しは空いていそうな車両に、やっと乗り込むのである。

駅構内には、駅員の姿はいつも殆ど見られないので、「日本の尻押し係り」が懐かしい？女性専用車両はこの国にもあるのに、「爺、婆専用車両はないのか？」など悪態の一つもつきたくなるが、しかし無駄というものだろう。「何を言っているのか！お前らみたいな年寄りの石潰しなんか、面倒なんか見ていられないよ」というのが、多くの国の共通規範なのだろう。混雑さだけではない。

路線によっては治安が悪いところもあり、市内中心部にある複数の線の接続駅では、混雑も酷く、日本人がスリの被害に会ったり、集団で囲まれてかっぱらいにあたりと、大使館から安全注意喚起が出されたときもあるほどで、当地の人さえ、地下鉄など公共の交通機関へ乗ったことがないと言う人もいる。

運賃とサービスの許容度の関係は、前提条件をいくつも入れれば、多元連立方程式となって、最適解を出すのは難しいだろうし、自家用車の増加と、公共交通機関の整備改善・普及とは、「鶏と卵の関係」にも似た、古くて新しいテーマでもあるが、当地の地下鉄は環境整備さえ整えれば、この地の人口を考えれば、将来的にはもっとも利用が増えるのではなかろうか。

ネガティブの面だけ書いてしまったが、それでは片手落ちだろう。運賃が安いだけあって客層も千差万別で、ここでもどなたかが仰せられた、「一般の人の目線で生活しなさい」という言葉を、少なからず実践でき、まさに生活に密着した、ダイナミックな庶民感覚の涵養が図れるのだなどと考えながら、またまた今日も、テキーラの杯を重ねるのであった。(2010年5月25日)



新聞記事より編集・・・比較的閑散とした風景だが、奥のほうに青空らしきものが見えるので、何処か郊外の駅だろうか？